

同時通訳はやめられない

—オバマ大統領の広島演説とトランプ大統領の就任演説を同時通訳して—

愛知県立大学外国語学部英米学科
袖川裕美

0. はじめに

『同時通訳はやめられない』(平凡社新書)を 2016 年に刊行したことにちなみ、2017 年 4 月 1 日、朝日カルチャーセンター新宿校で講演を行なった。タイトルは書名と同じで、副題を「オバマ大統領の広島演説とトランプ大統領の就任演説を同時通訳して」とした。

参加者は 40 人ほどで、現役の通訳者および通訳者を目指す人から、英語とは特に関わりのない人まで、拙著を読んだ人も読まない人もいた。本稿はその時の講演記録を改編したものである。

1. オバマ大統領 (Barack Obama) の広島演説

1.1 演説の前



オバマ大統領(2016 年当時)が広島を訪問し、演説するというニュースが伝わってきた。筆者が BBC ワールドニュースで同時通訳を担当することになった。新聞などでは、謝罪のない短い声明になると繰り返言われた。アメリカ国内では大統領の広島訪問に反対する人も多く、世論に配慮してのことだろう。漠然とながら、“あっさりした”、“ビジネス・ライク”な語りを想像していた。そのため、大きな仕事であるにもかかわらず、

あまり身構えていなかった。

5 月 27 日の当日も、本番が近づいても何の事前情報も入ってこなかった。大統領就任演説や一般教書演説については、世界の主要メディアには少なくとも 30 分前くらいには演説原稿のスク립トが入ってくる。だが、今回は、スク립トはおろか何分くらいのスピーチになるのかも何も分からなかった。

「breaking news(速報)」として入ってきた映像は、オバマ氏が安倍晋三首相と並んで平和記念公園を歩くところから始まり、原爆慰霊碑への献花、演説と続いた。

無音のなか、原爆ドームと慰霊碑を背に、オバマ大統領はゆっくりとかみしめるように語り始めた。だが、通訳者としては、最初の一文を聞いただけで、この後の難解さが予感された」(『同時通訳はやめられない』 pp.217-218)

1.2 演説の要約

演説の要旨を示す。

1941年8月6日の広島原爆投下の描写に始まり、人類と戦争の歴史について大きな視点から語られる。広島は人類の破滅をもたらしかねない科学の進歩、人間の“業”について考える場なのである。

かつて敵国だった日米関係は友好的な関係になった。テロや紛争解決のため、さらに核なき世界を作るためには外交努力が重要である。

最後に、現在の広島の平和を描き、広島と長崎は、核戦争の夜明けではなく、我々の道義的な目覚めの始まりとして記憶されるような、そうした未来を選択しようと訴えて、17分ほどの演説が終わった。

1.3 演説を聞く

オバマ氏の演説の冒頭および特徴的な場面を、講演の参加者とともに聞いた。

- Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

71年前、雲一つない晴れ渡った朝に、死が空から降ってきて、世界が一変しました。閃光(せんこう)と火の壁がひとつの都市を破壊し、人類が自らを滅ぼす手段を手にしたことを示しました。

通訳をしたとき、冒頭の文章の主語である「death(死)」が聞こえ、それに続いて「fell from the sky」が聞こえてきたが、これが何を意味するのか瞬時には判断できなかった。その後も、原爆投下の後の情景を「閃光(せんこう)と火の壁がひとつの都市を破壊」したとわずか数語で述べただけで、演説は一気に核心をつく、哲学的なメッセージに移行した。「人類は自らを破滅させる手段を手にした」と。悲惨ではあるのだが、原爆投下後の状況をもう少し言葉を費やしてくれたら、通訳者の思考もついていけるのだが、そうではなかった。最初の2文でこれだけのことが表現されているのである。平明な言葉使いながら、格調高く、詩的で、理念があった。練りあげられた“書き言葉”を同通することは本当に困難だった。

- Why do we come to this place, Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in the not so distant past.

我々はなぜここ広島を訪れるのでしょうか。それほど遠くない過去に解き放たれた恐ろしい力について思いを巡らすためです。

- **Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.**

魂が語りかけてくるのです。我々に内面を見つめ、自分たちが何者であり、何者になろうとしているのかを考えるように求めるのです。

ここでは広島に来ることの意味を述べている。人々の魂が語りかけてくるというオバマ氏の言葉は、そのまま我々日本人の魂、世界の人々の魂に響く。さらに、「内面を見つめる」という。哲学的な行為である。近年、政治家がこういう発言をするのを聞いたことがあるだろうか。

- **But among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear, and pursue a world without them.**

しかし、私の国のような核保有国は、恐怖の論理から脱する勇気を持ち、核兵器のない世界を追求しなければなりません。

- **We may not realize this goal in my lifetime.**

私の生きている間に、この目標は実現できないかもしれません。

「私の国のような核保有国」という表現には、自省の気持ちが込められている。自分が生きている間には核なき世界の実現は無理かもしれないとの言葉にも、自省と詠嘆的な思いが込められている。無力感とも取られなくないが、これがスピーチ全体に奥行きを与え、聞くものを感動させる。

また、「恐怖の論理から脱する勇気」とは何か。「恐怖から生まれる核の抑止への依存を断つ勇気」を意味することは、冷静になれば分かることだが、筆者はその場では言葉に転換したものの、真意をつかみきれなかった。

1.4 オバマ演説の特徴

以上、オバマ演説の特徴をあげると、1) 格調高く、詩的。2) 長い文章があり、練り上げられた書き言葉のようである。3) 理念がある。4) 思索的、自省的。5) 魂に響く。人を鼓舞する。6) 政治的・外交的配慮。過度な反省も、他者への非難もない。

大統領にはスピーチライターがいて、重要なスピーチはすべて事前に準備されるが、今回はオバマ氏がぎりぎりまで何度も推敲したという。オバマ氏の信念や使命、並々ならぬ思いが伝わってくる。それだけ練り上げられたスピーチを通訳するのは至難だったが、これほど重要な通訳をすることができたのは幸運であった。

2. トランプ大統領 (Donald Trump) の就任演説

2.1 トランプ氏の登場

2016年11月、アメリカにオバマ氏とは正反対の大統領が出現した。「型破りの」、「異例尽くしの」、「怪物」といった形容が定着したかのようなトランプ氏の大統領選当選は、世界を驚かせた。実際に大統領職に就けば、選挙戦での過激な発言も現実路線に転じていくだろうと言われていた。が、その兆しはなく、1年が過ぎた。

大統領就任演説については、通常、世界の主要メディアにスクリプトが配信される。ホワイトハウスには、世界に向けて正確な情報を伝える意思があり、通訳現場にも30分くらい前に届くことが多い。だが、今回は現場のコーディネーターの努力も虚しく、スクリプトを入手できなかった。マスコミを敵視するトランプ氏なら、これも「異例」で片づけられるのか。先が思いやられる。通訳仲間の話によると、民放では“ガセネタ”のスクリプトが出回ったという。「そういえば、通訳がしばらく、うろたえている感じがした」という視聴者の声を直接聞いた。通訳者の側からいえば、偽情報なら、ないほうがマシである。さらに付け加えると、議会初の施政方針演説もスクリプトの事前提供はなかった。

2.2 演説の概要



トランプ氏は、目の前に大統領経験者が居並ぶ中で既存の支配階級を批判。アメリカ第一主義を掲げ、アメリカを再び偉大な国にすると繰り返した。演説の趣旨はこれに尽きるであろう。

1950-60年代のアメリカ製造業最盛期の黄金時代への郷愁が漂う。象徴的だったのは、就任宣誓に使った赤い箱の聖書が50年代に母親から贈られたものだったことと、メラニア夫人がジャクリーヌ・ケネディ大統領夫人(大統領

就任式は1961年)を彷彿とさせるファッションで現れたことだ。

2.3 演説を聞く

トランプ氏の演説の特徴がよく出ている部分を聞く。

- ... because today we are not merely transferring power from one administration to another, or from one party to another, but we are transferring power from Washington, D.C. and giving it back to you, the people.

なぜなら、ひとつの政権から別の政権へ、または、ひとつの政党から別の政党へ、単なる政権交代をしているわけではなく、ワシントン D.C.から国民である皆さんへ、政権(権力)を取り戻しているのです。

- The forgotten men and women of our country will be forgotten no longer.

この国の忘れられた人々は、もう忘れ去られることはありません。

文章の構成が分かりやすい。transfer from ~ to ~の形式の文章(3つ目は変形)が、3文続いている。シンプルな言葉使いで、国民の手に権力を取り戻すと強調し、繁栄やグローバル化から取り残された、自分の支持者¹に訴えかけている。

- Washington flourished, but the people did not share in its wealth.
Politicians prospered, but the jobs left and the factories closed.
The establishment protected itself, but not the citizens of our country.

ワシントンは栄えましたが、国民は富の恩恵にあずかれませんでした。

政治家は繁栄しましたが、職は失われ、工場は閉鎖されました。

エスタブリッシュメント(既存の支配層)は保身に走り、市民を守ることはしなかったのです。

ここでも、同じような構造の文章が3文続いている。エスタブリッシュメント(既存の支配層・勢力)は栄えたが、国民は報われないということを繰り返す。このように、目の前にこれまでの政権の重鎮が居並ぶなかで、徹底的にエスタブリッシュメントを批判。だが、本人は富豪である。政治の主流派には属さなかったかもしれないが、主流派との関係なくして富は築けないであろう。経済界のエスタブリッシュメントとのつながりも深い。そうであるからこそ、政権の要職に経済界のリーダーを据えた。例：ティラーソン(Rex Tillerson) 国務長官は、アメリカ石油メジャー最大手エクソンモービルの前 CEO である。

- From this day forward, a new vision will govern our land.
From this day forward, it's going to be only America first, America first.
今日からは、新しいビジョンがアメリカを治めます。
今日からは、ひたすらアメリカが第一なのです。アメリカが第一なのです。
- Together, we will make America strong again.
We will make America wealthy again.
We will make America proud again.
We will make America safe again.
And, yes, together, we will make America great again.

¹ ミドルクラスからの転落者。ラストベルト地帯の人々。雇用喪失者および雇用喪失の予備軍である石炭産業の従事者らを指す。ラストベルトは五大湖周辺のさびついた工業地帯で、かつては従来型の製鉄所や製造業が栄えていた。今もブルーカラー労働者が多いエリア。

ともに、アメリカを再び強くします。
再び豊かにします。
再び誇り高くします。
再び安全にします。
そうです。ともに、アメリカを再び偉大にしましょう。

ここでも、同じ構造の文章を重ねて、「アメリカ第一主義」を掲げ、「偉大なアメリカを取り戻す」と主張している。

2.4 トランプ演説の特徴

以上、トランプ演説の特徴をあげると、1) 一文が短い。短文を繰り返す。シンプルな英語、シンプルなメッセージ。2) 選挙運動中と同じスローガンを繰り返す。3) 他者を激しく批判し、敵を作る。さすがに就任演説ではなかったが、失言しても気にしない。政治的に正しい言葉使い(political correctness)を無視。野卑な言葉を平然と使う。対立候補を貶める。こきおろす。例: crooked Hilary ひん曲がったヒラリー、Hilary is a liar. ヒラリーはうそつきだ。

中学生レベルの英語力でも理解できる。訴求力がある。我々日本人にとっても、英語ができるような気にさせてくれる。教材に使える。通訳も比較的容易である。

2.5 両氏の違い

このように、演説の一部を比較しただけで、両者の違いは明白である。さらに両者の違いを如実に示している例をもう一点あげよう。オバマ氏は国民の誰も取りこぼすことがないように配慮しているが、トランプ氏はおおざっぱな言い方しかしていない。

・オバマ氏 2008年11月の勝利演説から

(It's the answer spoken by) young and old, rich and poor, Democrat and Republican, black, white, Latino, Asian, Native American, gay, straight, disabled and not disabled.

若者もお年寄りも、富める者も貧しい者も、民主党員も共和党員も、黒人、白人、ラテン系、アジア系、先住民、同性愛者、異性愛者、障害者、健常者も。

・トランプ氏 2017年1月の大統領就任演説から

... we are black or brown or white, we all bleed the same red blood of patriots.

肌の色が黒であろうと、褐色であろうと、白であろうと、誰であろうと同じ愛国者の赤い血が流れています。

3. 「ポスト真実」の時代

3.1 トランプ氏が体現する「ポスト真実」

トランプ氏の登場は、よくも悪くも時代が大きく変化していることを示すものだ。それを端的に示すのが「truth(真実・事実)から post-truth(ポスト真実)へ」である。

トランプ氏は、大統領就任式の翌日から人々を唾然とさせた。就任式に集まった観衆の数について100万から150万人はいたと主張。上空から撮影した写真を掲載したマスコミに対して、オバマ氏の時に比べて意図的に少なく報道したと言って、かみついた。

大統領を擁護したコンウェイ大統領顧問(Kellyanne Elizabeth Conway)によると、これは alternative fact(代わりの事実)を示したのだという。写真を見れば誰の目にも明らかかなことをこんなふうに平然と言ってのけた。post-truthの象徴であった。



トランプ人形 都内商店街の七夕祭りで²

トランプ氏は大統領になってからも、ツイッターを使って言いたい放題のように見受けられる。事実との整合性は問わないようだ。だが、嫌われようと思ったことを言う「ホンネ主義」が、本物感を与え、根強い支持者がいる。

怖いのは、これを世界中が当然の前提と見るようになったことだ。世界は真面目な問題について真面目に取り組み、論ずることになぜか疲れている。ネットで隠微に好き勝手なことを言う風潮が蔓延してきたところへ、トランプ氏が出現した。もはや隠微である必要がなくなったのである。何でも公言してもいいかのような風潮になった。これは世界の文化さえ変えるもので、一種の「文化大革命」ではないかとさえ思う。

3.2 トランプ氏登場の背景

トランプ氏の勝利については、すでにさまざまな分析がなされている。一言でいうなら、トランプ氏の言葉は、正しく、美しいことを言うだけで生活をよくしてくれないエスタブリッシュメントに怒った国民(特に、格差に苦しむラストベストの人々)の心に響いたのだ。

格差は、実際の所得だけではない。以前なら、高卒でも真面目に働いていれば、親の世代よりいい暮らしができた。家も車もあって長期休暇も取れた。もはや、そういうアメリカンドリームが叶わなくなった。夢までも格差があるのだ。ミドルクラスの没落である。

こうした中で登場したトランプ氏は、政治学者のイアン・ブレマー(Ian Bremmer)氏が看破したアメリカ主導のグローバリゼーションの終焉を決定づけたといえよう。ブレマー氏

² 日本でもトランプ氏の極端な言動は大統領選の間から注目を集めた。「トランプのカード」を持つトランプ人形は大人気で、都内の七夕祭りに出された。撮影は岩村立郎氏。

は 2011 年にリーダーなき世界「G0 時代」の到来を予測し、自国の問題で手いっぱいアメリカに、もはや世界の問題を主導的に解決する力はないと論じた。

オバマ氏は、「アメリカは世界の警察たりえない」と発言したが、それでも世界の指導者たろうとしていた。だが、トランプ氏に至っては、これを明確に否定。ブレマー氏の予測は的中したと言えよう。

グローバリゼーションは、実はアメリカナイゼーション(アメリカ化)だと言われ、他の国は経済不況に苦しみながらも必死にグローバル化を推進してきた。ところが、今回の大統領選を通じて、実はアメリカ国内に取り残された人が大勢いたことが明らかになった。

一体、誰のためのグローバル化なのか。これを主導したのは、アメリカというより、アメリカのエスタブリッシュメントということになるだろうが、エスタブリッシュメント批判を繰り返すトランプ氏が、過去への郷愁にかられた人々を本当に救うことができるのか。トランプ氏は富豪であり、エスタブリッシュメントと組まずして成功なく、現在はその頂点に君臨する人物である。

矛盾だらけの政策、実行不可能な政策のなかで、トランプ氏が成果を出せなくなったとき、アメリカはどうするのだろうか。アメリカ的価値の崩壊は何をもたらすのか。世界にどう影響を与えるのか。きわめて不安である。

最近、*The Economist* (Nov.11th-17th 2017)に、こうした危惧を表した表紙が掲載された。ここには、”Endangered America’s future as a global power (「絶滅危惧種 グローバル・パワーとしてのアメリカの将来」と題して、トランプ氏のヘアスタイルを連想させる国鳥のハクトウワシの図柄が描かれていた³³。

4. 通訳を通して、「世界に触れる」、「世界を見る」

言葉によって人をつなぐ仕事をしている者にとって、言葉の真実さに信頼を置かない post-truth (ポスト真実)の時代は、よりどころのない時代である。しかし、こうした局面に陰ながらも触れられることが、この仕事の醍醐味であることに変わりない。自身を振り返ってみて、通訳にならなかつたら、世界情勢についてここまで考えることはなかったと思う。仕事を通して“世界に触れる”、“世界を見る”ようになったおかげである。それに伴って自身の考えも形成されていく。そこが面白い。これからも、言葉に関わることで、歴史的瞬間に立ち会っていけたらと思う。

³³ ハクトウワシは 1967 年に絶滅危惧種に指定されたが、現在は解除されている。

5. 通訳になるための勉強法

最後に、通訳になるための勉強法について触れ、通訳の 7 つ道具と自著『同時通訳はやめられない』を紹介した。

- 何か一つでいいので、それだけは徹底的にやる。
例：新聞を読む、本を読む。BBC や CNN を視聴する。
- 本番こそ実力をつける場なので、目の前の仕事に全力を注ぐ。
- 日々はあまり高みを目指さず、地味に努力する。
- 落ち込みを防ぐため、失敗にはちょっと鈍感に対応する。通訳になれるとかなれないとか思い煩わない。この点もちょっと鈍感に。
- 声の出し方、話し方、マナーなどにも意識を。

6. 口直しに

韓国・釜山大学のケリー教授 (Robert Kelly) が自宅で朝鮮問題について BBC ワールドニュースからインタビューを受けた (2017 年 3 月 10 日)。筆者はこの時、同時通訳のシフトに入っていて、たまたまこのインタビューを担当した。

ところが、難しい北朝鮮情勢について話している最中に、後ろの扉から子供たちが次々と部屋に入ってきたのだ。最初は女の子で、手を左右に振りながら、パパの近くにやってきた。片手に歯ブラシを握っているようだ。ケリー氏は、まずい状況にぎくりとしながらも平静を装いつつ、話し続けている。と、ほどなく、次の子が入ってきた。こちらはまだ一人歩きができず、歩行器に入ったまま、姉ちゃんに負けじと入りこんできた。ケリー氏は背後で気配を感じて動揺している。BBC のインタビュアーも、質問がどもり気味に。そこへ、今度は事態の急変を察知した母親 (ケリー夫人) がスライディングで飛び込んできた。身を低くして、なんとか画面に映らないようにしながら、二人の子供を連れだして行く。が、その姿は丸見えである。筆者も画面に気を取られて、何を訳したのか覚えていない。無邪気な子供と、あわてふためく親の姿はほほえましく、最高に幸せな場面だった。これには世界がにっこりしたようで、その後、BBC Daddy (BBC パパ) として、YouTube (ユーチューブ) でアクセスが急増。アメリカの *The ELLEN Show* (エレンの部屋) でも取り上げられた。いわく、“*Ellen Dissects the Kid-interrupted BBC interview*” (エレン、子供に邪魔された BBC インタビューを読み解く)。母親はどうやらトイレに入っていたようで、ジーンズのボタンが外れたまま飛び出してきたと解説。何度見ても笑わせる。ケリー氏はこれによって世界的著名人となった。子供のおかげである。同通をしているとこんな楽しいこともある。

参考までにこの番組で使われた、ちょっと難しい語句をあげる。1) a lurking mistake 目につきにくいミス、なかなか消えないミス 2) make break for it 逃げ出す 3) give a straight arm サッカーで敵に対して、腕を一杯に伸ばしてタックルする人を防ぐ行為。

7. 謝辞

今回の講演は、都立竹早高校の同級生である宮崎幸子(みやざき・さちこ)さんと、その元同僚であり、現在、朝日カルチャーセンターで通訳初級講座の講師をされている日高恭子さんのお二人の尽力で開催の運びとなった。筆者自身も、同センターで通訳初級・中級講座を担当したことがある。こうしたご縁により講演できたことに心から感謝したい。

参考文献

- イアン・ブレマー(北沢格訳) (2012) 『「G0」後の世界』 日本経済新聞出版社
- 金城隆一 (2016) 『ルポ・トランプ王国』 岩波新書
- 袖川裕美 (2016) 『同時通訳はやめられない』 平凡社新書
- 袖川裕美 (2017) 「訳に詰まった「ブラウン」 同時通訳のノート③」 水曜エッセー しんぶん赤旗(2017年1月25日付)
- 袖川裕美 (2017) 「“代わりの真実って何？” 同時通訳のノート④」 水曜エッセー しんぶん赤旗(2017年2月1日付)
- パトリック・ハーラン (2016) 『大統領の演説』 角川新書
- Tomohiro Osaki (2017) “Interpreters try to translate Trump,” *The Japan Times* (Feb.18, 2017)
- 「オバマ「変革」の時代」『多聴多読マガジン』1月号臨時増刊号 (2008) コスモピア
- 『オバマ大統領就任演説』 (2009) ゴマブックス株式会社
- 『通訳者・翻訳者になる本 2018』 (2017) イカロス出版
- 日本経済新聞(夕刊) (2017年3月24日付)
- 『事実より感情に訴え 「ポスト真実」(post-truth)とは?』
- “Endangered America’s future as a global power,” *The Economist* (Nov. 11th-17th) (cover page) The Economist Newspaper Limited.
- “Endangered,” *The Economist* (Nov.11th-17th). The Economist Newspaper Limited. p.11
- <https://www.youtube.com/watch?v=SSskp2PhQZE> オバマ大統領 広島演説
- <https://www.youtube.com/watch?v=qvMlgiVdv4k> トランプ大統領 就任演説
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%82%AF%E3%83%88%E3%82%A6%E3%83%AF%E3%82%B7> ハクトウワシ
- <https://www.youtube.com/watch?v=dmeBMvGhf1g> The Ellen Show